

昭和初期の汽車通学の学友 (※1)中第 31 回卒 佐藤 一雄 (※2)

私が旧制相馬中学に入学したのは昭和 3 年。関東大震災から 5 年目で世は大不況の暗い時代であった。

あの頃、原町地区の進学希望の子女は、相馬まで専用の汽車で通学したものである。その汽車通のおかげで、各駅からの新しい同期生と知り合い、人格形成のうえで大いに影響を受けたのは誠に有難いことであった。

朝の通学用の客車は愛称「マッチ箱」と呼ばれた明治時代の古い型のものであった。四輪貨車に長椅子を並べたような代物で、担バネ式の重量受けだけであったから、走り出すと「ユッサ、ユッサ」と揺れて、とても本など読める状態ではなかった。また、車両と車両間に通路がなく、車内にも中央通路がなかった。客車の窓側に幾つものドアがあって、六人掛の座席毎に横から乗降する仕組みであった。そんな車でも朝の通学は満員で重宝した。仲間の席は大体決っており、そこに各駅から乗り込んできたものである。

帰りの列車は普通列車であったが、何しろ本数が少ないので、乗り遅れると駅で 2 時間位は待たされたから、時間の切迫したときは学校から駅までひたすら走った。乗り遅れたときは落胆と汗と空腹で虚脱状態となったものである。

尊敬もし、親しくもした友に鹿島の塩谷 (※3) 君がいた。物静かで絵の上手な人であった。入学後次第に頭角を現し、最後はトップクラスの成績であった。仙台高工建築科に進み、国鉄（北海道）に就職したが、退職後 70 を待たずに他界された。一度ゆっくり話をしたかった友の一人である。

原町から同期入学した人に若松守朋君と云うのがいた。彼は小生と家が近所で小学以来の友であったが、秀才で幼くして大人の風格があった。父上の転勤で入学後間もなく、東京の名門私立校、麻布中学に転校したから、余り知られていないが、彼は後で東京大学工学部造船学科に進んだ。相中同期入学で東大に入ったのは彼一人である。残念ながら大東亜戦に巻き込まれ、海軍技術将校として散華した。生きのびていれば、産業界で一方の旗頭として天下に名を馳せた人であったと思う。父君は無線塔で名高い原町無線送信所長であり、礼儀知らずの小生など家族の方にも大変世話になった。

相馬も原町もあの頃の駅前には、貨物を運ぶ馬車の出入りがはげしく、馬糞が遠慮なく散らばっていた。同期生の館岡 (※4) 君の家は相馬駅前です頃運送店として繁昌していた。通学の仲間ではなかったが、帰りの汽車までの待ち時間を彼の個室に寄って雑談し迷惑をかけた。彼も薬専から東京工大へ進み稼業を継いだ。亡くなって暫くたつ。同期の友も死を急ぐこの頃である。

今では夢のような電車の走る時代となり、通学も楽になったが、あの頃の「マッチ箱」列車は我々が最後で廃車となった。相馬中学の専用通学列車が走っていたなつかしくも古い古い話である。

学校創立百年を迎え当時の通学時や学友を思い感無量の念にたえない。

(※1) 創立百周年記念誌『相中相高百年史』〈1998(平成10)年7月6日発行〉 第四部「思い出の記」より。

(※2) 原町出身。昭和 8 (1933) 年卒。国鉄教習所(専門)。

(※3) 塩谷六郎。鹿島出身。仙高工。

(※4) 館岡栄一。中村出身。東京工大。